

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00684

研究課題名(和文) 模擬国連を中心としたグローバル教育における国際交渉力の調査研究

研究課題名(英文) Survey on global negotiation skills in international education focusing on MUN

研究代表者

木田 剛 (KIDA, TSUYOSHI)

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：70584415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,900,000円

研究成果の概要(和文)：単なる英語運用能力を越えて国際場裡の問題を解決するために交渉・対話の場でリーダーシップを発揮して合意形成を先導していく実践的な能力と定義した国際交渉力をグローバル人材育成の重要な要素と捉えて、その教材として活用されている模擬国連(MUN)に参加する異なる学生の変化を実証的に分析し、国際交渉力の発達に相応しい学修環境の特徴を調査した。異なるMUNの比較や検証結果から国際交渉力の具体的な学習評価指標を開発し、得られた評価指標をもとに合理的なグローバル教育の方向性や指針を示した。また、国際教育のためのツールとして果たす潜在性を検証し、我が国の高等教育における具体的な役割や位置付けを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

模擬国連が潜在的に持つ学修項目を「スキル・テクニク」、「知識・理解」、「姿勢・価値観」の3レベルで整理し、具体的な27項目を抽出した。これらは国際交渉力を下支えする基本コンピテンシーであり、グローバル教育でも重要な学修項目である。能力涵養のためには、交渉すべき内容を重視する学修と英語運用能力を主に訓練するスキル学修の両方が必要である。英語の語学教員よりも日常的に英語で交流できる外国人留学生の有用性や、学術的に適切な内容重視学修を英語で担える教員の欠如が問題として浮上した。我が国における限られた教育資本を有効活用するためにも今後の教員人事計画や国際化プログラムを考える上で考慮すべき点であろう。

研究成果の概要(英文)：Global negotiation skills, defined as, beyond mere English communication skills, the practical ability to lead consensus building by exercising leadership in negotiations and dialogues to solve problems in the international arena, are considered as an important component of global education. Model United Nations (MUN), which is used as one of its teaching materials, is investigated and its participating students empirically analyzed to understand a learning environment good for the development of global negotiation skills. Based on the comparison of different MUNs and analyses of data coming from participants, a concrete learning evaluation index for global negotiation was developed with the purpose to provide a direction and guideline for rational global education. The potential of MUN as a tool for global education is also examined and its specific role in Japanese higher education is considered.

研究分野：外国語教育

キーワード：グローバル人材育成 グローバル教育 国際交渉力 評価指標 外国語教育 模擬国連 大学の国際化 国際比較

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年のグローバル人材育成への社会の関心の高まりの中、どのように学習項目を設定し、どのように教育成果を評価するかという点が曖昧なままグローバル教育が進展している現在、国際交渉力の概念を中心にグローバル教育を捉え直す試みを行い、よりわかりやすい評価基準や指針を提案した。具体的な教育実践として模擬国連(MUN)を活用した。

### 2. 研究の目的

国際交渉力をグローバル人材育成の重要な要素と捉えて、その教材として活用されている MUN に参加する異なる学生の変化を実証的に分析しながら、国際交渉力の発達に相応しい学修環境の特徴を調査することを目指した。検証結果からグローバル教育における体系的な学習評価指標を考案・開発し、得られた評価指標をもとに、合理的なグローバル教育の方向性や指針を社会に提示することを目指した。また、国内外の異なる枠組みの模擬国連を比較しながら、MUN が国際教育のために高大連携や学内連携のツールとして果たし得る潜在性を検証し、我が国における高等教育における MUN の具体的な役割や位置付けについて論じた。仮説として、内容の深い理解なしには国際交渉力は育たない、スキルさえ訓練すれば国際交渉力が発達する。前者が正しいければ、従来のディシプリン型教育は軽視されるべきではないことになり、後者が正しいければ、学生の国際交渉力を伸ばすには体系的な英語コミュニケーション学習が必要だという結論になる。この結論は学際型グローバル教育でカリキュラムポリシーを考えるにあたり 1 つの指針になりうる。まとめると、研究の目的は、MUN を通して国際交渉力とは何か、どのように学び、どのような環境で教えるべきかを探り、グローバル人材育成で求められるべき学修コンピテンスを具体化し、事業を進めるために教育環境をより良いものにしていくための指針を示唆することが目的である。

### 3. 研究の方法

以下の項目の調査研究を行った。グローバル人材コンピテンスを事前に設定し、そのアンケート調査を実施する。代表演説やポジションペーパー等の収集が容易な言語データを主な分析対象にする。異なる種類の参加者を比較し、国際交渉力と学習環境の関連性を探る。国内外の異なる MUN を視察し、参加者の国際交渉力の観点から比較する。MUN 参加を通して得る学びを事後アンケートで調査する。これらは研究者個々の教育経験やアンケート調査、そしてフィールドワークを通して得られる知見に基づき一定の仮説や結論を導き出すよう努めた。また、研究活動や焦点に体系性と順次性を担保するために、以下の共通する研究テーマを示した。Learners' Profiles、Learning Environment、Learners' Competence、Research Methodology for Global Education。新型コロナウイルス感染症の余波で、一部の国際会議が中止・延期などがまだ見られたため、2022 年度に一部の研究活動を延長した。また、対面に頼らないグローバル教育の実践に関する新たな研究課題が生まれたが、時間が限られたため十分な研究が実施されたとは言い難い。将来的に他の研究課題として扱われることを期待したい。

### 4. 研究成果

#### 1) Learners' Profiles 学修者プロフィール

##### 参加者のバックグラウンド

国内における MUN のひとつである TEMUN の参加者をバックグラウンド別に分類した。

TEMUN	1	2	3	4	5	6	7	Total
Undergraduates	25	22	43	30	44	64	83	311 (62.2%)
Graduates	18	16	26	31	36	23	19	169 (33.5%)
Others	0	0	0	6	0	14	10	30 (0.6%)
TOTAL	43	38	69	67	80	101	112	505

TEMUN	1	2	3	4	5	6	7	Total
HSS	38 88.4%	31 81.6%	41 62.1%	37 56.9%	46 57.4%	58 57.4%	70 62.5%	321 63.6%
	Humanities	19	9	14	22	16	29	125
	Social Sciences	19	22	27	15	30	42	196
STEM	4 9.3%	6 15.8%	15 22.7%	26 40.0%	34 42.5%	27 26.7%	24 21.4%	136 26.9%
	Life & Environmental	2	3	8	16	21	17	80
	Engineering & Technology	1	2	5	8	7	5	38
	Medical & Sports	1	1	2	2	6	5	18
Others	1	1	10 15.2%	2	0	16 15.8%	18 16.1%	48 9.5%
Multidisciplinary			15.2%	2	0	16	18	48
TOTAL	43	38	69	67	80	101	112	505

TEMUN	1	2	3	4	5	6	7	Total
International	27(62.8%)	19(50.0%)	31(47.0%)	49(72.3%)	59(73.8%)	70(69.3%)	69(61.6%)	316(63.8%)
Japanese	16(37.2%)	19(50.0%)	35(53.0%)	18(27.7%)	21(26.3%)	31(30.7%)	41(38.4%)	182(36.2%)
TOTAL	43	38	69	67	80	101	112	505

まず、アカデミックレベルとして学部生が 62.2%、大学院生（修士・博士）が 33.5%となり、学部生参加が 6 割を超えている。専門別では、人文社会系（HSS）が 63.6%、理工医学系（STEM）が 26.9%と、人文社会系学生の参加が 6 割を超えている。文理融合のグローバル専攻が増加傾向にある。次に外国人留学生在が 6 割を超えている。外国人留学生には繰り返し参加するリピーターが含まれているが、日本人学生が繰り返し参加することはほとんどなかった。

期待する学修項目

次に、参加を通して学修したいと思っている項目について MUN 開催前に事前アンケートを取った。全体的に見ると、学部生はスキルを中心にした項目を学びたいと思っている一方、大学院生は知識、スキル、態度の学修が同じように重要と考えているようで、僅かながら学修指向性の違いが見られる。

	Knowledge	Skills	Attitudes
Undergraduate	31%	43%	23%
Graduate	31%	34%	35%

次に、参加後に向上した、あるいは学びがあった学修項目を 5 段階の自己評価アンケート調査を行った。その結果が以下通りである。全体的に学びの少なかった学修項目として「科学的知識」、「リーダーシップ」、「革新性・創造性」が挙げられるが、短期間で学修成果が得にくい項目であるか、MUN の性質上、これらの項目の学修機会はなかったものと推測される。学部生に関して、大学院生と比べると「スキル・テクニク」で成果があったようで、加えて「グローバル社会」、「地球規模課題」、「多様性」の理解が進んだと回答している。グローバル専攻型の学生について、スキル・テクニク型項目と態度・姿勢型項目全般において比較的高い自己評価が見られ、「地球規模課題」、「合意形成」「積極性」の面で特に学びがあったと回答している。日本人学生については、「スキル・テクニク」と「態度・価値観」の両方で向上が見られなかったと回答しており、他の種類の学生と比べると全体的に学習成果の自己評価が低い。

Overall	Knowledge/Understanding												Skills/Techniques												Attitudes/Values												TOTAL
	Scientific	Global ethics	Transdisciplinary	Global citizenship	Cultural	Global issues	Global issues	Diversity	Language Proficiency	Public Speaking	Teamwork	Problem Solving	Critical Thinking	Information Literacy	Research	Communication	Leadership	Global Citizenship	Critical Thinking	Open-mindedness	Self-awareness	Resilience															
BA	3.75	4.04	3.98	4.15	4.42	4.27	4.65	4.46	4.02	4.10	4.19	4.35	4.23	4.06	4.10	4.00	4.17	4.33	3.79	3.81	4.38	4.21	4.31	4.20	4.31	4.16	4.18	4.16	4.16								
MS	3.65	3.70	3.77	4.00	4.14	3.95	4.13	4.12	3.66	3.72	3.77	3.91	3.92	3.91	3.80	3.63	3.80	4.03	3.56	3.86	4.33	3.67	3.70	3.81	3.83	3.59	3.78	3.59	3.78								
STEM	3.33	3.85	3.84	3.98	4.22	4.12	4.22	4.27	4.22	3.84	3.66	3.84	4.05	3.92	3.78	3.88	3.71	3.91	4.22	3.53	3.85	3.79	3.84	3.80	3.96	3.90	3.84	3.88	3.88								
HSS	3.98	3.86	3.90	4.27	4.31	4.09	4.34	4.60	4.34	3.75	4.07	4.02	4.38	4.18	4.11	3.96	3.98	4.09	3.86	3.56	3.87	3.91	4.07	4.02	4.06	3.93	3.89	3.89	3.89								
NonSP	3.12	4.00	3.78	4.01	4.23	3.89	4.05	3.88	4.13	4.00	4.31	4.23	4.11	4.31	4.01	4.22	4.11	4.11	4.13	3.88	4.22	4.01	4.01	4.11	4.11	4.08	4.11	4.08	4.11								
JP	3.00	3.84	3.92	3.68	4.08	3.84	4.18	4.08	4.00	3.52	3.84	3.84	3.80	3.54	3.18	3.76	3.38	3.96	2.82	3.44	3.60	3.24	3.48	3.92	3.72	3.36	3.36	3.36	3.36								
HE	3.18	3.80	3.81	4.01	4.23	4.03	4.23	4.30	4.22	3.80	3.80	3.81	4.01	4.02	3.80	3.92	3.71	3.89	4.14	3.71	3.49	3.91	3.81	3.91	3.91	4.01	3.92	3.91	3.91								

2) Learning Environment 学修環境

MUN の参加における問題を把握するために学生と教員に対して行った自由アンケートによると (Cowie 2019)、英語交渉と決議文作成の訓練により学修時間が必要であるようだ。しかし、MUN に不慣れな初任教師も少なくなく、教員を指導するための枠組みの必要性が示唆されている。MUN 参加において学生が使用しているデジタル・テクノロジーを調査した (Cowie 2021)。準備段階では、情報収集や共有に使用されるものが多数ある (Google 関連ツール、Line、Padlet など)。イベント参加において、報告書や決議案の作成に主に使用されるツールは Google Docs だった。教員による学生指導に関して、翻訳ソフトや文章共同作成ツールの効果的な使用が参加の成功の鍵を握るため、これらのデジタル・テクノロジーの訓練を授業に取り込む重要性が示された。MUN は、参加学生がある特定の国の代表として行動する大規模なロールプレイ活動である。事前に当該国に関する基礎情報や、気候変動や核兵器などの地球規模課題についても集中的に学修して参加を準備する。また、参加学生は、会議アジェンダで示された特定の問題を解決するのに、他の代表と交渉しながら決議文を作成することから、外交官のような交渉力と英語力が同時に求められる。母語で行うのも大変なのに、全員が英語でコミュニケーションを行う MUN ではさらに作業のハードルを高める。しかし、多くの学生にとって人生を変えるほどの出来事であり、MUN 以外の科目における学修意欲を高める役割が認められる。コロナ禍における学生の学修意欲低下という一般傾向の中で、MUN の参加学生のみ TOEIC の点数が飛躍的に上がるという現象が見られた (Fast 2021)。アンケートを行ったところ、MUN が提供する学修環境は目的意識を持って学習を行うことができたという意見が多かった。オンラインのおかげでできた時間の余裕を聴解力の向上や語彙の拡充に活用した。また、オンラインであっても、MUN への参加はさまざまな種類のコミュニケーション活動を行う機会になった。高校では英語を勉強したが、MUN では英語を使用することを学んだ。多くの学生は、MUN のようなトピックは問わずに英語で議論する科目を増やすべきという意見、教員主導の授業ではなく学習者主体で進める授業が必要という意見などがあつた。さらに、英語ネイティブでなくとも多様なバックグラウンドを持つ外国人留學生や外国人教員の多い学習環境が理想という意見

があり、時折日本人の英語教員が日本人学生同士の間で英語で話させることに対する違和感が示されたのは興味深い。

### 3) Learners' Competence 学修者コンピテンス

特定の談話分析を通して国際交渉力を測った (Parepa & Kida 2022, Kida 2023)。参加者のポジションペーパー (PP) を談話分析すると、以下の種類が見られた。

Type	Length	Richness	Subjectivity	談話の特徴
A	++	++	++	長く、論理マーカ―や主観性マーカ―の豊か
B	++/+	++/+	-	比較的長く論理マーカ―あるが主観性に欠ける
C	++/+	--	++/+	比較的長く主観性はあるが論理マーカ―に欠ける
D	-	+	--/-	論理マーカ―はあるが、比較的短く主観性に欠ける
E	--/-	--	+	主観性はあるが、比較的短く論理マーカ―に欠ける
F	--/-	--/-	--/-	長さは短く、論理マーカ―と主観性両方に欠ける

フィールド観察から3種類のコミュニケーション形態が見られるが、PPとの関連性は以下の通りである。

「Oral Entertainer」: PPをあまり気にせずに、観衆に対して自由なスピーチを行うスタイル、主にCタイプ(部分的にDタイプとEタイプ)が多い。主張がまとまっていないこともある。口頭スキルには自信があるため、PPをぞんざいに扱ったのかもしれない。また、この種の学生はグループ議論で中心的な役割を果たしているとはいえ、他の参加者との交渉に貢献できているのか明らかにする必要がある。

「scenario performer」: PPの文面を見ながらも、観衆に呼びかけるようなスピーチスタイルで、主にAタイプとBタイプが多い。STEMの外国人留学生によく観察された。この種の学生は落ち着いた姿勢で議論に参加している印象があり、ループ議論でも他の学生に配慮をしながら交渉に臨んでいるようだ。

「scenario reader」: PPの文面を読み上げることに終始するスタイルで、DタイプとEタイプとFタイプが多く、日本人学生の多く含まれる。この種の学生はグループ議論でも無言か聞き役に徹していることが多い。この種の学生にはPPを書く談話能力に加えて、聴解力や産出能力を中心にした総合的なコミュニケーション能力を訓練する必要性が認められる。

### 4) Research Methodology for Global Education グローバル教育のための研究方法

模擬国連で入手できるデータを以下にまとめる。主なものはテキスト形式の言語データとビデオデータ(録画機器が必要)だが、イベントの事前・事後に参加者に対してアンケートを取ることを推奨する。

Activity	Activities-Skills	Competences	Oral/Written Outcomes	Data
Before conference (Research)	Information literacy Data collection and analysis Reading & Writing discourse Synthesis	Linguistic C. Communicative C. Discourse C.	Position Paper	Text
During the conference (simulation)				
Delegate speech (Formal debate)	Presentation Rhetoric (V&NV)	Linguistic C. Communicative C. Discourse C.	Formal Speech (Memo)	Video
Unmoderate caucusing -regional bloc -committee	Debate Mutual understanding Consensus building Collaborative writing	Pragmatic C. Discourse C. Interactive C.	Informal debate Working Paper	Video Text
Moderate caucusing	Critical thinking Public interaction	Discourse C. Interactive C.	Formal debate	Video
Amendment	Persuasion	Persuasion	Draft Resolution	Text
Vote	Decision-making	Decision-making	Resolution	Text

### 5) 国際交渉力を把握するための評価指標

この能力は単なる英語運用能力を超えて、コミュニケーション行為や相互行為をマネジメントする側面がある。英語運用能力は国際交渉力の一部に過ぎないことは理解する必要がある。ここでは学修項目を「知識・理解」「技術・スキル」「姿勢・態度・価値観」の3レベルで整理し、それぞれ順次性と体系性を考慮した27の学修項目を設定した。これらは国際交渉力を下支えるものであり、知識・理解に関する学修が重要であることはいうまでもなく、これらの能力の涵養できる教員を配置する必要がある。また、技術・スキルも英語運用能力以上にICT能力や情報収集に関する能力に加えて、問題発見力、問題解決力、マネジメント力などの汎用コンピテンスの学修を忘れてはならない。

知識・理解	技術・スキル	姿勢・態度・価値観
<ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバル社会</li> <li>・地球規模課題</li> <li>・多様性・複雑性</li> <li>・国際社会の相互依存</li> <li>・文化多様性</li> <li>・共生社会</li> <li>・異文化理解力</li> <li>・グローバルシチズンシップ</li> <li>・専門知識</li> <li>・異分野理解力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報収集力</li> <li>・情報活用力</li> <li>・他者対話力</li> <li>・情報発信力</li> <li>・国際コミュニケーション</li> <li>・問題発見力</li> <li>・文化発信力</li> <li>・合意形成力</li> <li>・対話マネジメント力</li> <li>・問題解決力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者理解</li> <li>・自己認識・理解</li> <li>・積極性</li> <li>・共感力・対人関係構築</li> <li>・クリティカル思考</li> <li>・意見提案力</li> <li>・行動力</li> <li>・他者尊重・寛容性</li> <li>・リーダーシップ</li> <li>・革新的創造性</li> </ul>

## 6) 結論

MUNの参加学生の学術バックグラウンド(専門・専攻、学術レベル、外国人留学生・日本人学生)を記述した。開催されるMUNの種類により異なるが、ここでは日本で開催されたMUNの参加状況を明らかにした。一部の参加者に対して、MUN参加を通して学びたいと考えている学修項目についてアンケートを行い、異なるバックグラウンドによる違いがあることを明らかにした。また、MUN参加後に学修できたとそれぞれの参加者が考える項目について調査を行い、異なる学術バックグラウンドにより学習成果が異なることを明らかにした。主なものは、学部生と大学院生との違いや、日本人学生と外国人留学生との違い、人文社会系学生(いわゆる文系学生)と理工医学系学生(いわゆる理系学生)とこれらに当てはまらないグローバル専攻の学生との違いである。MUNが潜在的に持つ学修項目を「スキル・テクニック」、「知識・理解」、「姿勢・価値観」に3つのレベルで考察し、各レベルに考えうる具体的な27学修項目を抽出した。これらの学修項目は国際交渉力を下支えする基本的なコンピテンシーであるが、同時にグローバル人材育成においても必要なコンピテンシーとして提案する。さらに、国際交渉力を言語・コミュニケーション能力として具体的に定義するために、談話分析を活用して、上述の学術バックグラウンドの異なる学生の交渉力を測る方法を開発し、フィールド観察で得られた口語コミュニケーションとの関連性について考察した。以上の研究活動を通して見出しうる模擬国連にアプローチする研究方法を提示した。これには書面のポジションペーパー(PP)の分析に加え、ビデオやフィールド観察で得られるプレゼンターとしての能力を組み合わせること、そしてMUN事前・事後に行うアンケート調査である。この調査は自己評価アンケートであることから、実際の交渉力とは異なるかもしれないが、言語データや口語コミュニケーションの分析に比べると現実的な方法であるといえる。さらに、学生がどのような学修環境や教育方法を必要としているのかを見出すこともできるため、国際交渉力学修やグローバル教育を考察する上で有効であることを示すことができた。

学習者の異なるプロフィールにより重視すべき学修項目を示唆し、我が国における限られた教育資本を有効活用するための指針を示し、両者の有効性について議論した。能力涵養のためには、交渉すべき内容を重視する学修と英語運用能力を主に訓練するスキル学修の両方が必要である。英語の語学教員よりも日常的に英語で交流できる外国人留学生の有用性や、学術的に適切な内容重視学修を英語で担える教員の欠如が問題として浮上した。我が国における限られた教育資本を有効活用するために、今後の教員人事計画や国際化プログラムを考える上で考慮すべき点である。また、近年の学際型プログラムを含むグローバル教育全般にとっても1つの指針となるだろう。

大学の初期段階から(できれば中等教育から)グループ活動や議論を中心に据えた科目を通して交渉活動に慣れておく必要がある。模擬国連を行うには、医学・理工系の学生を含めた学術バックグラウンドの多様性を富む参加形態が望ましい。特に理工系やグローバル専攻の学生は国際交渉力をそれぞれの専門で訓練されており、人社系の参加者に欠けている部分を補う。また、口語コミュニケーションに長けている外国人留学生はグループ議論に見られる交渉力を身につける必要がある。

日本人学生の参加について、しかし、短期間で身につけられるものではないと思われる。コミュニケーション行動における消極性を補うために、扱うアジェンダに関する学修が必要であろう。また、国際社会でしばし話題になるアジェンダや地球規模課題に関する知識を身につけておくことが望ましい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Gelsomini, F., Kanev, K., Barneva, R., Bottoni, P., Tatsuki, D. H. & Roccaforte, M.	4. 巻 -
2. 論文標題 BYOD, Collaborative Storytelling in Tangible Technology-Enhanced Language Learning Settings	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Mobile Technologies and Applications for the Internet of Things (Proceedings of the 12th IMCL Conference)	6. 最初と最後の頁 22-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-030-11434-3_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 ZENUK-NISHIDE, Lori, TATSUKI, Donna., HOLLENBACK, Michael	4. 巻 71(1)
2. 論文標題 National Model United Nations: Building Political and Self Efficacy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸外大学論叢	6. 最初と最後の頁 23-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI, Donna	4. 巻 59
2. 論文標題 Historical Overview of Foreign Language Policies in Japan. Language Policy, Innovations and Practices: A Tale of Two Countries	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Research Institute (Kobe Gaidai)	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI, Donna	4. 巻 59
2. 論文標題 Introduction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Research Institute (Kobe Gaidai)	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 INUGAI-DIXON Carol	4. 巻 -
2. 論文標題 Aligning principles and practices of IB and TEMUN: a reflection on tensions and contradictions	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kobe	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 INUGAI-DIXON Carol	4. 巻 -
2. 論文標題 Transformative education in systems, programmes and individuals: challenges and hopes in Japan and beyond	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Global Campaign	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石田 尊	4. 巻 -
2. 論文標題 ナガラ節内における主格の認可について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語統語論研究の広がり：記述と理論の往還 (竹沢幸一/本間伸輔/田川拓海/石田尊/松岡幹就/島田雅晴 [編])	6. 最初と最後の頁 171-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KIDA, Tsuyoshi;PAREPA, Laura-Anca	4. 巻 1
2. 論文標題 Research framework for global education and international communication: The case of model united nations	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 GEIC working papers I: Learners' profiles (Proceedings of the International conference GEIC 2018)	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KIDA, Tsuyoshi; SMITH, Craig	4. 巻 1
2. 論文標題 The development of experiential learning tasks in international multi-disciplinary global issues programmes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 GEIC working papers 1: Learners' profiles (Proceedings of the International conference GEIC 2018)	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Cowie, Neil	4. 巻 72, 4
2. 論文標題 Student transcription for reflective language learning	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ELT Journal	6. 最初と最後の頁 435-444
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Cowie, Neil; Sakui, Keiko	4. 巻 5
2. 論文標題 Learning English through digital projects: A Japanese university case study.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Osaka JALT Journal	6. 最初と最後の頁 20-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI Donna; ZENUK-NISHIDE, Lori	4. 巻 58
2. 論文標題 MUN perspectives on teaching and learning: A focus on negotiation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Research Institute (Kobe City University of Foreign Studies)	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 ZENUK-NISHIDE, Lori	4. 巻 58
2. 論文標題 Research is key to Model United Nations writing, negotiating and public speaking	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Research Institute (Kobe City University of Foreign Studies)	6. 最初と最後の頁 25-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI Donna	4. 巻 1
2. 論文標題 Problematizing Native Speaker/ELF-user Interactions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 GEIC working papers I: Learners' profiles (Proceedings of the International conference GEIC 2018)	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI Donna	4. 巻 1
2. 論文標題 Instructional material development in L2 pragmatics	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Pragmatics (N. Taguchi ed., New York: Routledge)	6. 最初と最後の頁 312-337
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI Donna	4. 巻 58
2. 論文標題 ELF in MUN Negotiations: Problematizing the Native Speaker	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Research Institute (Kobe City University of Foreign Studies)	6. 最初と最後の頁 55--76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TATSUKI Donna; ZENUK-NISHIDE, Lori	4. 巻 15
2. 論文標題 MUN as CLIL	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CLIL alla Tuscia (Viterbo: Sette Citta)	6. 最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 INUGAI-DIXON, Carol	4. 巻 1
2. 論文標題 Towards a more holistic education: Challenges and opportunities	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 GEIC working papers I: Learners' profiles (Proceedings of the International conference GEIC 2018)	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計38件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 TATSUKI Donna
2. 発表標題 Use Questions, Ignite Interactions
3. 学会等名 Seminario di studi sulla comunicazione nelle relazioni internazionali, Istituto degli Innocenti (Florence, Italy) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MORBIDUCCI Marina, TATSUKI Donna
2. 発表標題 MUN, ELF and TIGs: Three Realities in Interaction. The Sapienza Experience
3. 学会等名 CLIL, Learning Technologies, Innovation (Viterbo, Italy) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TATSUKI Donna, ZENUK-NISHIDE Lori
2. 発表標題 Technology Enhances CLIL Model United Nations Preparation and Simulation
3. 学会等名 CLIL, Learning Technologies, Innovation (Viterbo, Italy) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TATSUKI Donna
2. 発表標題 A Taste of MUN
3. 学会等名 Global Negotiation Symposium (Kobe City University of Foreign Studies)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ZENUK-NISHIDE Lori, TATSUKI Donna, FAST Tom
2. 発表標題 Global Citizenship through Model United Nations
3. 学会等名 JALT Pan-SIG (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ZENUL-NISHIDE Lori
2. 発表標題 KASA and Self-efficacy through JUEMUN
3. 学会等名 3rd Global Negotiation Symposium
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ZENUK-Nishide Lori
2. 発表標題 MUN Simulation: Security Council
3. 学会等名 Universita Telematica Degli Studi Iul (Florence, Italy) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 FAST, Thomas
2. 発表標題 IB-Style Language Learning in Practice: CBI & CLIL
3. 学会等名 The 6th International Baccalaureate Education Forum (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 FAST, Thomas
2. 発表標題 What Is Global Competence And How Can Universities Foster It?
3. 学会等名 4th Annual Conference of the Association for Research into Japan IB Education (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAITO Sonoko
2. 発表標題 A Bilingual Approach to English Model United Nations: A Method to Promote Active Learning
3. 学会等名 Notre Dame Seishin University International Communication and Community Development Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 INUGAI-DIXON Carol
2. 発表標題 Puzzling pieces
3. 学会等名 TEDX Tsukuba (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 COWIE Neil
2. 発表標題 Creating collaborative documents for Model United Nations events
3. 学会等名 International Communication and Community Development Conference (Notre Dame Seishin University, Okayama)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 COWIE Neil
2. 発表標題 The role of digital technology in Model United Nations
3. 学会等名 Third Global Negotiation Symposium. Kobe City University of Foreign Studies (Kobe)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KIDA Tsuyoshi, PAREPA Laura-Anca
2. 発表標題 Issues and challenges around higher education in Japan
3. 学会等名 The rise of Asia in global history and perspective: 65 years after Bandung: What rupture and what continuity in global order? (University Le Havre Normandie) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KIDA Tsuyoshi
2. 発表標題 Historical return to socio-economic nexus of infrastructure-development in Africa: lessons for a rising Asia
3. 学会等名 The rise of Asia in global history and perspective: 65 years after Bandung: What rupture and what continuity in global order? (University Le Havre Normandie) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KIDA Tsuyoshi
2. 発表標題 A new French-based register? Analysis of commercial naming in public urban space in Japan
3. 学会等名 International conference on Asian Linguistic Anthropology (CALA) 2020 (Bintulu, Malaysia) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KIDA Tsuyoshi
2. 発表標題 Japan: 65 years of international cooperation
3. 学会等名 Symposium “The world and Bandung 65 years on: what assessment?” (University Paris 1 Pantheon-Sorbonne) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KIDA, Tsuyoshi; PAREPA, Laura-Anca
2. 発表標題 The role of global education in alleviating conflict and building inclusive societies
3. 学会等名 The rise of Asia in global history and perspective (University of Paris 1, Paris/Le Havre University, Le Havre, France) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Kida, Tsuyoshi
2 . 発表標題 Global negotiation in foreign language education in Japan
3 . 学会等名 Japan - Premodern, modern and contemporary (Dimitrie Cantemir Christian University, Bucharest) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Kida, Tsuyoshi
2 . 発表標題 General Framework of JSPS-KAKENHI Research Project for MUN
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Kida, Tsuyoshi
2 . 発表標題 Evolution of Learners' Profile in Tsukuba English Model United Nations (TEMUN)
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Cowie, Neil; Sakui, Keiko
2 . 発表標題 How do we keep motivating learners?: Using online platforms to teach language
3 . 学会等名 SoTEL Symposium (Auckland University of Technology, Auckland, New Zealand) (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Cowie, Neil
2 . 発表標題 In-class poster creation: Four skills plus drawing!
3 . 学会等名 21CLT Conference (Uruma, Okinawa, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Cowie, Neil; Sakui, Keiko
2 . 発表標題 Using informal online platforms to teach language: What and How?
3 . 学会等名 JALTCALL Annual Conference (Meijo University, Nagoya, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Cowie, Neil
2 . 発表標題 Model United Nations: Student and teacher views.
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 TATSUKI, Donna; ZENUK-NISHIDE, Lori; FAST, Thomas; SMITH, Craig
2 . 発表標題 Model United Nations simulations: Developing learner voices and agency
3 . 学会等名 8th Independent Learning Association Conference (Kobe, Japan) (国際学会)
4 . 発表年 2018年



1 . 発表者名 ZENUK-NISHIDE, Lori
2 . 発表標題 Development of self through a community of practice
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 TATSUKI Donna
2 . 発表標題 Problematizing Native Speaker/ELF-user Interactions
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Morbiducci, M; Tatsuki, D
2 . 発表標題 ELF, Affect and Attitudes in Model United Nations Simulations
3 . 学会等名 2nd international Conference on Bilingualism (University of Malta, Malta)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 TATSUKI Donna
2 . 発表標題 Language Policy, Innovations and Practices: A Tale of Two Countries
3 . 学会等名 2nd international Conference on Bilingualism (University of Malta, Malta)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 SAITO, Sonoko
2 . 発表標題 NMUN New York 2018 Participation
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 FAST, Thomas
2 . 発表標題 The Model UN: Training for Global Citizens
3 . 学会等名 8th Independent Learning Association Conference (Kobe, Japan) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 FAST, Thomas
2 . 発表標題 What Makes a Global Citizen? Side by Side Comparisons of Frameworks, Proposals and Initiatives
3 . 学会等名 3rd Annual Conference of the Association for Research into Japan IB Education
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 INUGAI-DIXON, Carol
2 . 発表標題 Extending any learner profile. Through SEE Learning
3 . 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 INUGAI-DIXON, Carol; BASNET, Ashish
2. 発表標題 TEMUN and TOK (IB). Making links
3. 学会等名 International Conference GEIC 2018 (University of Tsukuba, Tsukuba, Japan)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田 尊
2. 発表標題 場所ヲ格句の範疇と格の認可
3. 学会等名 第15回現代日本語文法研究会（実践女子大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田 尊
2. 発表標題 いわゆるA類節内における主格の認可について
3. 学会等名 第157回関東日本語談話会（学習院女子大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田 尊
2. 発表標題 現代日本語受動文の多様性について：有生性制限の役割
3. 学会等名 『「られる」と「らさる」の言語学～日本語の受動文・関連構文をめぐって～』（加賀信広教授還暦記念言語学特別ワークショップ、筑波大学）
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 KIDA, Tsuyoshi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Research Forum on Global Education and International Communication (GEIC)	5. 総ページ数 57
3. 書名 GEIC working papers I: Learners' profiles	

1. 著者名 TATSUKI, Donna; ZENUK-NISHIDE, Lori	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Kobe City University of Foreign Studies, Research Institute of Foreign Studies	5. 総ページ数 191
3. 書名 Global Negotiation: Perspectives on Teaching and Learning (Journal of Research Institute, 58)	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

本科学研究費の研究者が研究期間中に参加した模擬国連：NMUN (NY, 2018 March), JUEMUN (Kyoto, 2018 June), TEMUN (Tsukuba, 2018 November), NMUN (China, 2018 November), NMUN (NY, 2019 March), JUEMUN (Kobe, 2019 June), NMUN (Germany, 2019 November), JUEMUN (Online, 2020 June), IMUNO (Online, 2020 November), NMUN (NY online, 2021 March), JUEMUN (online, 2021 June), NMUN (NY DC online, 2021 November), NMUN (DC, 2021 November), NMUN (NY, 2022 April), JUEMUN (Okayama, 2022 June), NMUN (Kobe, 2022 November)

開催した国際会議のHP：Research Forum on GEIC (<https://temun-gnp.wixsite.com/geic1>)

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	ファースト トーマス  (FAST THOMAS)  (10714305)	ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授   (35305)	

## 6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	COWIE NEIL JAMES  (COWIE NEIL JAMES)  (30379812)	岡山大学・全学教育・学生支援機構・教授    (15301)	
研究分担者	ZENUK 西出 Lori  (ZENUK NISHIDE LORI)  (30453145)	神戸市外国語大学・外国語学部・教授    (24501)	
研究分担者	生田 祐子  (IKUTA YUKO)  (50275848)	文教大学・国際学部・教授    (32408)	
研究分担者	PAREPA LAURA・ANCA  (PAREPA LAURA-ANCA)  (60837920)	津田塾大学・総合政策研究所・研究員    (32642)	
研究分担者	齊藤 園子  (SAITO SONOKO)  (70390466)	北九州市立大学・外国語学部・准教授    (27101)	
研究分担者	濱嶋 聡  (HAMASHIMA SATORU)  (80238063)	名古屋外国語大学・世界共生学部・教授    (33925)	
研究分担者	立木 ドナ  (TATSUKI DONNA)  (80347517)	神戸市外国語大学・外国語学部・教授    (24501)	
研究分担者	Inugai Carol  (INUGAI CAROL)  (90817032)	筑波大学・教育推進部・客員教授    (12102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石田 尊  (ISHIDA TAKERU)  (40387113)	筑波大学・人文社会系・准教授    (12102)	
研究分担者	Smith Craig  (SMITH CRAIG)  (60390100)	京都外国語大学・外国語学部・教授    (34302)	削除：2019年2月26日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Tsukuba English Model United Nations	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 International Conference GEIC 2018	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関